

「密入国者の手記」と『二つの祖国』 に見る望郷者の物語 —引き裂かれたアイデンティティの再構築—

王曉芸 / Wang, Hsiao-Yun

真理大學應用外語系日本語文學組 助理教授

Department of Applied Foreign Languages Japanese and Literature Section,
Aletheia University

【摘要】

本稿係以邱永漢的《密入國者的手記》和山崎豐子的《兩個祖國》兩部作品作為研究對象的文本。由於兩個文本中所描繪的登場人物都是實際存在的人物，因此在本稿中使用了羅蘭・巴特的「物語的構造分析」的論點來加以論述分析。

在擺脫了作者和真實人物的影響後，從文本所描寫的文字來看，曾經經歷了殖民地經驗或者移民經驗者，都不約而同地承受了殖民主義的支配；而這種殖民政策的作用力即便到了戰後仍然持續進行著。在自我同一性 (Identity) 被自己和他者的意識形態拉扯的過程中，當事者越想接近主體，卻越凸顯出其被邊緣化的特性。同時，在這樣的過程中，「言語」常常被當作重要的工具被政治權力者所操弄、並以此玩弄著被殖民者或者移民者。在本稿中，也將從言語學的視野來考察此一過程，同時揭露在殖民地和移民地所存在的多元文化主義的假面。

【關鍵字】

作者之死、自我犧牲、書寫文、言語學、多元文化主義

【Abstract】

Eikan Kyu's "Illegal Immigrants' Script" and Yamasaki Toyoko's "Two Homelands" were used as the targets of this study. Because the characters illustrated in the two texts were real-life people, the argument in "Introduction to the Structural Analysis of Narratives" proposed by Roland Barthes was used to conduct discourse analysis.

After disregarding the influence of authors and real-life people, the texts

illustrate that people who experienced colonial life or immigration life both were subjected to colonialism. The effect of colonial policies continued after World War II. During the process that ego identity is diverged by the egoistic ideology and ideology of otherness, the closer the actor moves toward the subject, the more obvious the actor is marginalized. Simultaneously, language is often used as a critical tool manipulated by political power holders to control colonized people or immigrants. In this study, the linguistic perspective was used to observe the process and reveal the mask of multiculturalism on colony and immigration places.

【Keywords】

The Death of the Author, self-sacrifice, écriture, linguistics, multiculturalism

一、はじめに

1945年に敗戦を迎えた日本は植民地台湾から引き揚げることになった。台湾におけるコロニアリズムの影響力がその時から薄まっていくかのように思われるものの、実のところその働きが多かれ少なかれ続いている。日本統治期の台湾人は、たえず植民者である「他者の感情、他者の考え、他者の意欲、他者の性格」¹などを積極的に見習っていたが、サルトルが示しているように、「他者との合一は、事実上、実現されえない」²皮肉な有様がある。しかし、終戦直後の台湾人は依然として曖昧な窮地に陥った。なぜならば、とりわけ日本語が堪能な知識階層でありながら日本人になれない彼らは、戦後に至っても相変わらず自己同一性が混淆するため、その自己像すらうまく描くことができず、「国籍不明者」という危うい立場に陥ってしまったからである。実は、被植民者のみならず、第二次世界大戦下のアメリカ国内の移民にも、自己同一性の混淆状態が生じることがあった。

本稿では、戦後に発表された邱永漢が描いた「密入国者の手記」³を論じながら、コロニアリズムの作用力は如何にして台湾人に内的な変容を発酵させたのかを見出してみる。また第四章では、戦時中アメリカに移住し差別された日本人一世、二世の境遇を描いた山崎豊子の『二つの祖国』⁴を取り扱って考察する。この二作品によれば、自ら「移民地」に移住する者も、やむを得ず「植民地」の住民となる者も、自己の主体性を認めてもらおうとする際に、まずぶつかったのは政治権力者からの差別的扱いであったことが分かる。

国家は、もともと一国民を庇護する土台であるが、移民地あるいは植民地において、いくら「私」の存在を強調しようとしても、その「私」を堂々たる「国民」として認めてくれるのはその「私」ではなく、常に主体性を持つ他者である。言い換えれば、一国の国籍を持つことは当然その国の国民であるものの、全くそうでもない例もある。この二作品に描かれている登場人物は、たとえ国

¹ J・P・サルトル（2005）第三部「対他存在」—『存在と無』（上）人文書院p. 408、409

² 前掲書『存在と無』（下）p. 712

³ 邱永漢著「密入国者の手記」—黒川創編（1996）『南方・南洋／台湾』新宿書房

本名邱炳南の邱永漢は台北高等学校在学の時に、詩誌『月来香』（1939）を創刊し、同年西川満が編集した『華麗島』の創刊号において詩作「廢港」を発表した。戦後、「密入国者の手記」で日本文壇にデビューしてから、「濁水溪」、「香港」などの作品を創作し、1956年に「香港」で第34回直木賞（1956年下半年）を受賞した。その後、「お金もうけの神様」と呼ばれる彼は経済評論家として活躍していたが、2012年5月16日に心不全のため88歳の高齢で他界された。

⁴ 『二つの祖国』は、『不毛地帯』、『大地の子』と合わせて、山崎豊子の「戦争三部作」と呼ばれている。（2011）『二つの祖国』（一）（二）（三）（四）新潮文庫

また、残念ながら、山崎豊子（本名杉本豊子）は2013年9月29日に、同じく心不全のため88歳で生涯を終えた。

の言語が堪能であっても、国民として受け入れられず、永遠に疎外されて国家の周縁にしか留まることができないよそ者である。

「密入国者の手記」の主人公游天徳と『二つの祖国』の主人公天羽賢治はそのような代表人物である。作品中、彼らが植民宗主国あるいは移民先の言語に堪能であり、その国籍を持つものの、異邦人扱いされてしまうことが皮肉にも描かれている。主体から疎外された「自己」（＝被植民者・移民者）を真に国民の一人としてみなすことは実に容易ではない。何故ならば、国籍問題が簡単に解決できても、血縁上の障壁を容易に破るわけにはいかないのである。

「国」への忠誠心が認められるまで、その「自己」は「密入国者」で、「二つの祖国」を持つ者でしかない。

本稿では、「作者の死」、「テキスト論」というロラン・バルトが述べている観点を援用し、実存する人物を題材として創作される作品を考察する。また、言語学の観点をを用い、言語の影響力は時には武器を凌駕し、とりわけ植民地・移民地における「階級的な性格」をもつ言語は、異民族を籠絡したり、治めたり、さらに疎外したりする働きを有することを解明する。

戦後発表された「密入国者の手記」、『二つの祖国』の考察を通じて、コロニアリズムあるいは移民政策が唱える異民族を同一視するスローガンに、仮面がかぶせられていることが分かる。

二、「物語の構造分析」から見たテキスト

まず、「密入国者の手記」⁵の物語構造を考察する。「密入国者の手記」は、作者邱永漢が戦時中台北高校文科甲類⁶の同窓であった王育徳のことをモデルにして描いたものである。実は、もう一つの作品『濁水溪』⁷においても、邱永漢は王の兄王育霖のことを「蘇判事」という名で描写することがある。二人は高校時代の「よき親友」であったが、戦後の回想録で王育徳は、邱永漢に対して「馴染み難いものを感じ」⁸たというイメージを描いており、また自分の家族のことが邱の小説の題材になったことに対して「あまりいい気持ちはしな

⁵ 本稿で取り扱うテキストは『南方・南洋／台湾』（黒川創編、1996）に収録されているものであり、2012年に、この作品は再び『コレクション戦争と文学18 帝国日本と台湾・南方』（集英社、2012・12・10）に収録されている。

⁶ 台北高等学校（現在の国立台湾師範大学本部）は1922年に創立された大学向けの予備学校であった。最初は「尋常科」（修業年限は三年）しか設けられておらず、1925年に「高等科」も設立し（修業年限は四年）、「高等科」にはまた文科と理科に分けている。甲類とは第一外国語を英語、第二外国語をドイツ語とするコースである。

⁷ 邱永漢の『濁水溪』は、昭和29年（1954年下期）に第32回直木賞の候補になった作品である。

⁸ 王育徳（2011）『「昭和」を生きた台湾青年』草思社 p. 182

かった」⁹と述べている。なぜならば、小説に描かれている兄王育霖の出来事は「歪曲し」たところがあるからだ。それゆえに「いくらなんでもひどすぎる」という当事者の不快感が回想録に記されることになったのである。岡崎郁子もこのような経緯に練り上げられた「密入国者の手記」は、邱永漢が「王育徳の親類縁者とその後の不和軋轢を招いた」¹⁰と述べている。実は、この作品には王育徳の人物像が描写されているのみならず、二・二八事件の政治の渦巻きに巻き込まれた邱永漢自身の出来事も織り込まれている。

さて、このように二重の実人物をモデルにして描かれる物語を如何に味わえばいいのであろうか。

ロラン・バルトの『物語の構造分析』が示すところによれば、テキストは「無数にある文化の中心からやって来た引用の織物であ」¹¹り、作者は「エクリチュール」を書く役割しか果たさない存在である。さらに、テキストを書き終えた際に、作者は自然に「作者の死」という境地を迎えると述べている。また、たとえ描かれている登場人物が実モデルであっても、その実人物は「逸話的、歴史的」に生きる者であり、物語のキャラクターの「二義的、派生的な断片にすぎない」¹²のである。それゆえ、物語のパラダイムを越えて本当にキャラクターを生きさせるのは書き手の作者ではなく、読み手のわれわれであると言える。また、バルトは「作者は作品の父である」と述べており、テキストというのは「その父親の保証がなくても読むことができる」¹³ものと示している。いわば、テキストは作者の創作「系譜」から逸脱されたものとして存在して読者に読まれるものである。

よって、ロラン・バルトの説に従ってみれば、歴史的に実在した王育徳かつ邱永漢は、「密入国者の手記」の主人公「私」の「二義的、派生的な断片にすぎ」ず、読者のわれわれは、物語を味わっているうちに改めてその「私」に生命力を与え、「私」を生きさせるのである。「多次元の空間」¹⁴であるテキストは、歴史的、文化的や地理的なエクリチュールによって織り出されるものであ

⁹ 前掲注8

¹⁰ 岡崎郁子（1996）『台湾文学—異端の系譜』田畑書店

¹¹ ロラン・バルト（2010）「作者の死」—『物語の構造分析』みすず書房 p.85、86

¹² ロラン・バルトはブルーストの小説『失われた時を求めて』を例として、その小説に描かれている登場人物シャルリュスがモンテスキュー伯爵という実人物をモデルに描かれるものであるが、かかる「逸話的、歴史的に実在したモンテスキューが、シャルリュスの二義的、派生的な断片にすぎない」と述べている。前掲書『物語の構造分析』 p.82、83

¹³ バルトは「方法、ジャンル、記号、複数性、系譜、読書、快楽」という七つの項目から「作品」と「テキスト」の相違性を区別する。「作品からテキストへ」—『物語の構造分析』p.100

¹⁴ 前掲書『物語の構造分析』 p.85

るが、それを読むときに、われわれを育ててきた歴史的、文化的や地理的なファクターもひとりでに織り込まれると考えられる。それゆえ、エクリチュールの全貌は単なる作者の描いたものではなく、本当は読者の解釈があつてはじめて、エクリチュールの全貌が明らかになると言えよう。

一方、『二つの祖国』の題材については「盗作」¹⁵の疑惑があると評されている。鵜飼清はこの作品の「主人公とストーリーが、すでに刊行されていた物語と酷似している」¹⁶と指摘している。その「すでに刊行されていた物語」とは、1967年に原書房により刊行された島村喬の作品『二重国籍者』である。『二つの祖国』のあとがきに山崎が「この小説は冒頭でもお断りしたように歴史的事実を再構築したフィクションであるが、主人公の原点ともいべき人物をお教え下さったのは、元陸軍大佐町田敬二氏である」¹⁷と書いている。それによれば、『二つの祖国』は虚構の物語であるが、主人公の天羽賢治は町田敬二が提供した資料によって描き出された人物と分かる。しかしながら、島村喬の『二重国籍者』の付記においても、物語の資料提供者は町田敬二であることが書かれており、要するに、二作には「共通する資料提供者がいた」¹⁸のである。また、天羽賢治のモデルは、鹿児島加治木町出身のアメリカ人である日系二世の伊丹明であるという¹⁹。

虚構の物語に実在する人物がいることは、とりわけ問題があるわけではない。

¹⁵ 栗原裕一郎（2011）『〈盗作〉の文学史』新曜社 p. 188－231

¹⁶ 鵜飼清によれば、そもそもその疑惑を指摘しているのは、1983年10月号の「マスコミ評論」に掲載されている「盗作二度の実績はダテじゃなかった！？」－山崎豊子著『二つの祖国』にあった「ネタ本。」という文章であり、問題となる類似点は「主人公の設定、東京裁判のモニター、恋人が広島で被爆死、本人の自殺」などがある。それについての詳細な分析は、鵜飼清の『山崎豊子問題小説の研究』をご参照ください。

鵜飼清著（2002）第Ⅰ部「第4章ネタ本があった？『二つの祖国』」－『山崎豊子問題小説の研究』社会評論社 p. 71

¹⁷ 「あとがき」－『二つの祖国』（四）p. 533

¹⁸ 前掲注16 p. 72

『二重国籍者』の「付記」には、作者の島村喬が「この物語りの執筆完成に当って、鹿児島県出身の元陸軍大佐町田敬二氏（現在鎌倉市在住）の長い調査による資料に大変負うところがあることを感謝しなければならない」（「付記」－『二重国籍者』p. 287）と書いている。それによれば、二作品の題材提供者はともに町田敬二という者が分かる。

¹⁹ 1984年に放送されるNHKの大河ドラマ「山河燃ゆ」は、『二つの祖国』を基にして作られたものである。当時主人公天羽賢治を演じるのは俳優の松本幸四朗であり、松本は「天羽賢治を演じて」（『大東フォーラム』第13号、2000）に主人公の賢治が実在する伊丹明とう人物をもとに作られたものだと示している。これについての詳細な経緯は、『山崎豊子問題小説の研究』をご参照ください。（第Ⅵ部「第3章 山崎豊子という国民作家の作られ方とその役割」p. 404）

実際のところ、「伊丹明」を巡って作品化された物語は、『二つの祖国』と『二重国籍者』のほかに、また島村喬が描く『東京裁判秘史』（ゆまにて出版、1983）と郡南昭が描く『化石の花火』（葦・真文社出版、1981）の二作品がある。また、『実録 山河燃ゆ』において、島村喬は「日系通訳官」伊丹明「の謎の死」という題の文章を寄稿し、「伊丹明」の生い立ちを詳しく描いている。（（1983）『実録 山河燃ゆ』ゆまにて出版 p. 46－p. 191）

本稿においては、「盗作」か創作か、あるいは『二重国籍者』と『二つの祖国』の類似点についての分析は行わず、考察の対象となるのは『二つの祖国』に描かれているエクリチュールそのものである。

前述のように、「密入国者の手記」の主人公游天徳は、王育徳そして作者邱永漢のことをモデルにして作り上げたキャラクターであるのに対し、『二つの祖国』に描かれる主人公天羽賢治のモデルは、日系二世のアメリカ人伊丹明という人物である。物語の登場人物は実在する人物であっても、ロラン・バルトの論説を用いてみれば、それは「二義的、派生的な断片」であり、「逸話的、歴史的」に生きる者であると考えられる。「多次元の空間」に育てられた読者が、そこに描かれているエクリチュールに生命力をもたらし、エクリチュールが生きていることになる。

三、去勢された密入国の「望郷者」

「密入国者の手記」は、不法入国で日本に強制送還の判決を下された主人公の游天徳が書いた判事宛の書簡である。植民地台湾生まれの宿命の下で、天徳はやむを得ず「日本人」となるが、日本が敗戦したため、一度も中国を母国として認めようもしない彼は再び中国人となる。実際のところ、彼は「日本・台湾・中国」という国籍帰属の三叉路に立つのである。「日本以外に行くべき所をもたない」と申し出る彼の本当の「母国」は、一体どこにあるのであろうか。かつて「青年期の危機」²⁰を経た二十九歳の彼は、「植民地経験」という歴史的衝撃を受けつつ、絶えず「母国」というイメージのパズルを解いている。

二十九歳の今日に至るまで、私は日本の植民地である台湾に生まれたばかりに、自分の運命というものをほとんどいつも人の手に握られてきました。運命を他人に握られるという意識は、いつも私の反抗精神を刺激し、私をいっそう不自由な立場に陥れてきましたが、正直のところ貴方様は今までに私の運命を握った人うちで最も信頼のおける人だという印象を私に与えてくださいました。（「密入国者の手記」 p.262）

²⁰エリクソンは「アイデンティティの危機」を「青年期と成人初期に帰することにした」としており、さらに「個人の人生におけるアイデンティティの危機と、歴史発達における現代の危機とを切り離すこともできない」と示している。アイデンティティの形成に欠かせない「原型」は、エリクソンが「心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとの間のすべての相互作用」であることを表している。

E・H・エリクソン著、岩瀬庸理訳（1994）『青年と危機 アイデンティティ』金沢文庫p. 6、p. 16

引用のように、もとの宗主国であった日本に強制退去される天徳は、エトランゼの如く進退窮まる苦境に陥っており、身を委ねる所は台湾でもなく、中国でもない。「日本以外に行くべき所をもたない」彼は、結局「私の父親にどことなく似ている」判事の手自分の運命を握らせることにする。再び「運命を他人に握られる」という決定は、日本に永住するための便宜上の策略であると言えども、そこにはかつての宗主国であった日本への思慕があるし、復帰した中国政権への不信もある。

前も述べたように、「密入国者の手記」の主人公は作者邱永漢の友人王育徳をモデルにして描写したものであるが、その中に台湾の二・二八事件の渦中に巻き込まれた邱永漢が、亡命者の身分で日本へ不法入国した事実もある。丸川哲史はこのような「亡命者文学」は、「台湾に残った台湾人が蒙ったさまざまなアイデンティティの屈折—変容の一つの支流」²¹であると示している。しかし、なぜ戦後になると、ほかの国へ赴くことなく、台湾人が日本にしか亡命できなくなったのであろうか。戦後、日本の植民統治から転じて中国国民党による政権を迎える歴史経験のギャップを目の当たりにした台湾人は、これまでの皇民化教育によって醸し出された自己同一性を改めて検討しなくてはならなくなる。日本語の教育に育てられてきた王育徳であれ邱永漢であれ、さらに游天徳であれ日本語の使用が禁止された戦後の台湾社会に直面し、如何ほど疎外感を感じたのかは想像に難くない。

ここで、まず言語の習得を考察してみる。有名な言語学者であるチョムスキーが「生成文法」という方法論を提唱するが、彼は言語の習得を「言語能力」(linguistic competence)と「言語運用」(linguistic performance) (以下は「」省略)に分けている。その言語能力とは、言語の使用者が、用いる言語に隠される差異や規則を弁え、多くの言語形式を産出することができる能力とのことである²²。また、言語運用は、チョムスキーが単に「言語規則の体系が設定する音と意味の内在的な結合を」反映することではなく、「言語外的な信念や状況」²³などの話者に関わる伝統文化や思惟方式も、言語運用のメカニズムに必要な

²¹ 丸川哲史 (2000) 「第四章亡命者のエクリチュール」—『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社 p. 99

²² さらに、「言語能力」についてチョムスキーが、「言語使用の能力をもつ人間は、文の音形とその内面的意味内容の両方を決定する規則の体系を、何らかの方法で身に付けている」と述べている。ノーム・チョムスキー (2011) 「第五章言語の形式的性質」—『言語と精神』河出書房新社 p. 210

²³ 前掲注22。

役割を果たすと述べている。

戦後、台湾の公用語が中国語へと変換されることは、日本語を使っていた者がこれまでの言語運用の軌道から離脱せざるを得ないことを意味する。つまり、日本語が堪能であるからこそ立派な日本人になる、という戦時下のイデオロギーと、戦後の台湾時勢とはあまりにも懸隔したので、言語運用のメカニズムに欠かせない歴史的や文化的なものは、再び組み立て直さなければならない。「密入国者の手記」において戦後の台湾問題を「階級的なものではなく、民族的なもの」と見なす天徳は、親友の黄秋成に次のように述べている。

「(前略) どうも台湾人はこの五十年間、日本の統治を受けているあいだに、日本人とも違うが、そうかといって中国人とも違うべつの新しい民族になってしまったのではないかという気がする」(「密入国者の手記」 p.275)

「べつの新しい民族」を創ろうと主張する天徳の考えは仮に可能であっても、この「新しい民族」を適切に言説することができるエクリチュールは如何なるものであろうか。日本語教育の知識を持つ天徳のようなインテリは、台湾語(「^{びんご}閩語」)のほかに最も親しみに感じる言語は日本語であることは言うまでもない。「完全な日本語を話しますから日本人として立派に通用」するというつもりで日本に亡命した彼は、言語運用のメカニズムに欠かせない日本的なものを根底にして「新しい自己発見」を遂行しようと試みたと言える。内地(日本)延長線であった台湾が国民党政権へ返還されることを、「文化程度の高い人間が文化程度の低い人間に強権で治められ」ることとして意識する彼のラングやエクリチュールは、実際のところ日本的なものである。日本語で物事が言説できる彼の自負が、判事への書簡によって端的に表される。しかし、サルトルが示すように、他者の面前における自己の自負は、ただ「平衡のない感情であり、自己欺瞞の感情である」²⁴だけのことである。

それゆえ、植民地台湾→国民党政権→敗戦後の日本といった多次元の空間によって醸し出される不連続的なアイデンティティは、やはり天徳を進退窮まる境地に陥らせる。渋谷鶴子は「情報・知識・アイデンティティ」の関連性を次

²⁴ 前掲書『存在と無』(上) p. 510

のように述べている²⁵。

「知識」としてとりいれた場合は、個人が異文化を理解し、そのやりとりにおいて変化を強いられることになる。「情報」として取り入れた場合は、異文化の表面的なデータを吸収することのみにとどまる。前者の場合は、アイデンティティの基盤である信念や価値観、そして自己概念が揺らぐ可能性があるが、後者ではその可能性はない。

引用によれば、「アイデンティティの基盤」を動揺させるものは知識であることが分かる。エクリチュールはまさに知識産出の一つである。不連続の歴史経験によって織り出された天徳のアイデンティティは、実際のところ引き裂かれた様相を呈する。彼の知識の根底にあるものは、私塾で学んだ漢学知識だけではなく、最も重要なのは公学校から大学にかけて日本語で習得した知識であると考えられる。チョムスキーが示しているように、「言語は一つの認知システム」²⁶であり、知識は言語によって構築されるものである。書簡に書かれているエクリチュールは、天徳が日本語の言語能力かつ言語運用の知識を完全に備えていることを裏付ける。

しかしながら、如何に日本的な知識を見せつけようとしても無駄である。岡崎郁子が述べているように、当時の日本は、もっぱら高度成長への取り組みを積極的に行い、戦後の台湾政治や台湾人の運命には「全く関心は薄れてしまい、興味すら抱かない」²⁷という状態であった。それゆえ、日本的な「アイデンティティの基盤である信念や価値観」がいくら堅固であろうとも、日本にしてみれば、彼を去勢された他者としてしか取り扱えない。天徳は亡命したが、その亡命先はもとの宗主国であるため、亡命というより「望郷」の思いを持って日本へ「帰る」と言ってもよからう。しかし、敗戦の日本に見捨てられた彼は去勢された望郷者であり、国籍不明の密入国者でしかない。

実際のところ、このような国籍の問題は、一刻も早く解決しなければ二世にまで及ぶ。天徳が日本の居住権を獲得せねばならぬもう一つの原因は即ち二世問題に結び付いている。

²⁵ 洪沢田鶴子(1999)「異文化交流とアイデンティティ」—『アイデンティティ』日本評論社 p. 15

²⁶ ノーム・チョムスキー(2008)「講義1 メンタリズムと行動」—『言語と認知』秀英書房 p. 39

²⁷ 前掲注10 「第二章邱永漢—戦後台湾文学の原点」p. 118

もう一つ、私の妻は現在妊娠中でございます。もし私の籍の問題が片づきませんと、生まれてくる子供の籍もどうしたらよいかわかりません。妻も私もこの問題で日夜悩んでおり、いっそのことおろしてしまうべきではないかとも思っています。（「密入国者の手記」 p.283）

それは苦肉の策であることは言うまでもないが、戦後の台湾人が国籍問題で苦境に立っていた実相も明らかに露呈する。植民地時代においては主体の枠組みに入り込もうとした台湾人は、引き裂かれた自己同一性のジレンマに挟まれていたのみならず、その問題の酷さが二世にまで絡み付いていたのである。こうしたコロニアリズムの作用は植民地だけではなく、移民地にも及ぶことがある。一見自ら移民先に赴く移民たちとコロニアリズムとの間に繋がりを持たないように見えるものの、戦争態勢の下で彼らは人的資源として動員されることがある。

次に、山崎豊子の『二つの祖国』を用いてそれを考察してみる。

四、山崎豊子の『二つの祖国』について

日系二世の天羽賢治は、家族とアメリカへ移住したが、太平洋戦争が開戦したため、どちらの祖国に忠誠心を尽すべきかということで天羽家を分裂させてしまう。堪能な英語が話せるものの、「ジャップ」と呼ばれる日系米人の賢治は自己矛盾に陥ってしまう。戸籍上はアメリカ人であるといえども、アメリカ人さらにアメリカ政府に差別された不平等な扱いで、彼は改めて自己同一性の帰属を検討する。こうした有様は植民地時代の台湾においても見られる。戦後発表される張文環の『地に這うもの』に、台湾人が改姓名しても、戸籍上に「○」という目印が付けられており、「丸台日本人」²⁸とからかわれることが描かれている。植民地におけるこうした人種差別の呼び方は決して稀ではなく、フランス領のマルチニック島の黒人も「ニグロ」²⁹という蔑称で呼ばれることもある。実はこのような蔑称は一つの羞恥であり、被植民者あるいは移民者は

²⁸ 『地に這うもの』において、改姓名についての描写は引用のようである。

しかし改姓名者は「丸台日本人」と呼ばれていた。ほんものの日本人と混同しないため、丸の中に台という字のはいった印が押してある。これがたちまち街じゅうに知れ渡った。（「第一章」—（1975）『地に這うもの』p.9）

²⁹ フレンツ・ファノン（2005）『黒い皮膚、白い仮面』みすず書房

「羞恥によって私の存在の一つの姿を発見した」³⁰（傍点は原文）のである。

言い換えれば、植民地と同じように、移民地においても主体の枠を容易に突破することができないのである。

（1）自己欺瞞から自己犠牲にかけての道程

太平洋戦争が猛烈な勢いで進むにつれ、賢治一家はアメリカ国籍を持っても、元馬小屋の日系人強制収容所に入れられた。審問官の質問に、「民族的な意味では、日本が父祖の国ではありますが、私の国籍はアメリカであり、私の祖国がアメリカ合衆国」³¹であると答える賢治は、「敵性外国人」と見なされて多くの忠誠試練を受けることになる。作品中、戦争協力のために日系米人に「忠誠テスト」を行うことは、大切な国籍の問題を「イエスノー」という二者択一のいい加減な方法で解決することを意味する。

一体「祖国とは何か」、という被植民・移民経験を体験した者の自己存在に関わる難問がテキストの中に織り込まれている。こうしたジレンマの危機に直面し、内面化されたナショナル・アイデンティティの秩序が崩壊し始めた時に、これまで自己を支えてくる信念も揺るぎ始める。柏端達也は「ある信念を抱こうという意図の自覚が、まさにその意図を挫くよう」³²だと述べている。その過程において「自己欺瞞」の行為が生じ、さらにその「自己欺瞞」自体が「信念の真正の矛盾を含む」³³ことを意味する。「密入国者の手記」の天徳と『二つの祖国』の賢治が持つ信念とは、自分は植民宗主国の日本・移民先のアメリカの一国民であるということである。しかし、それはあくまでも主体性が欠落する自己主張であり、「信念の真正の矛盾を含む」ある自己欺瞞の行為に過ぎない。

賢治一家は自らアメリカに移住する日系人であるが、戦争協力によって「国家」への忠誠心を表明せざるをえない。実際のところ、戦時中のアメリカ国内

³⁰ 前掲書『存在と無』（上）p. 398

³¹ 「一章ジャップ」－『二つの祖国』 p. 76

³² 柏端達也（2007）「第1部自己欺瞞」－『自己欺瞞と自己犠牲』勁草書房 p. 12

また、柏端達也が「自己欺瞞」という行為の最もシンプルな特徴について、「（i）ほんとうはPであることを知っているにもかかわらず、Pでないと信じている。（ii）願望や恐怖などの情動的要素が自己欺瞞の信念の原因にある。（iii）Pでないと信じる根拠が、当人のもつ根拠全体に照らして薄弱である」（『自己欺瞞と自己犠牲』p. 18）としている。第二次世界大戦の下で、恐怖、驚き、不安などの感情の動きと自己存在の危機とが相まって作用した結果、自己欺瞞という行動を起こすのである。

³³ 前掲注32

においても、いわゆる植民地主義が発酵していたことが分かる。主体性を持たない他者として疎外された移住民は、「「本当のところおれは何者か」という問いをたえず自分に提起させることになる」³⁴のである。賢治は十年ぶりに「父祖の国」である日本へ帰ったが、日本人に「移民の子、恥」と罵倒される一方、アメリカにおいても「ジャップと蔑^{さげす}まれ、惨めな思い」を舐めてきたのである。いずれの「祖国」にも差別排除された賢治は、「日系アメリカ人として生きようと決意」し³⁵、アメリカ情報部の日本語教官になることによって、アメリカへの忠誠心を表すことに決める。

(2) 戦争協力における言語の作用力

戦争協力の要請には、「言語」は重要な術である。バイリンガルの賢治は日本語も英語も堪能であるがゆえに、アメリカ政府に情報兵として戦争協力を要請される。アメリカ国籍を持つ彼は、「日本語」というツールを用い、自分は立派なアメリカ人であることを裏付けようと努める。こうした決意表明の裏には引用のような意向がある。

賢治は、もはや、自分の前に二つの門しかないことを知った。一つは戦場へ狩り出されていく絶望の門、もう一つは、日本語学校の教官になり、日本人の精神形成、風俗、風習を含めた日本人の心を理解させるために日本語を教えるという門であった。後者には、いささかの救いがあるといえるかもしれない。（傍点は筆者。「五章人間テスト」—『二つの祖国』（一）p.462）

引用によれば、言語は戦争協力を承諾した賢治のとった術であり、言語運用と言語能力の働きは彼に「二世の本分」³⁶を果たす機会を与えるようになる。しかし二世であるため、賢治の背負った重荷も二重である。ファノンによれば、マルチニックでは黒人が主体である白人に近づくために、フランス語を「白人

³⁴ フレンツ・ファノン(2006)「5植民地戦争と精神障害」—『地に呪われたる者』みすず書房 p. 244

³⁵ 「一章ジャップ」—『二つの祖国』（一）p. 33

³⁶ 「五章人間テスト」—『二つの祖国』（一）p. 467

のように話す」³⁷ことに骨を折ったのである。英語を通して日系米人に日本語を教える賢治は、自己の忠誠心を証明しつつ、自己同一性の混淆状態に陥ってしまう。なぜならば、一つの言語を話すことは、「一つの文化を引き受けること、一つの文明の重みを耐えること」³⁸を意味するからである。「日本人の精神形成、風俗、風習を含めた日本人の心を理解させるために日本語を教える」ことは、日本の文化・文明の重みだけでなく、アメリカ的なものも耐えなければならない。英語を自分の国語にすれば、一層アメリカ人に近づく反面、父祖の祖国である日本から次第に遠ざかっていく含みもある。無論逆も同じである。板ばさみの境地に陥った賢治は、アイデンティティが「二つの祖国」に引き裂かれたのである。

捕獲文書の翻訳、加治木の言葉が入った暗号電文の解説、降伏勧告文の執筆はいずれも、英語・日本語・鹿児島弁といった三つの言語が複雑に絡み合っており、作り出されたもので、いずれのエクリチュールにも三つの重なる文明・文化の重みがある。一体、「文化」あるいは「文明」とは何であろうか。「人類学の父」と呼ばれるエドワード・タイラーが「文化あるいは文明とは、そのひろい民族誌学上の意味で理解されているところでは、社会の成員としての人間 (man) によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、慣習や、他のいろいろな能力や習性 (habits) を含む複雑な総体である」³⁹と示しており、それはまさにファノンの「文明の重み」そのものである。賢治は戦争協力という自己犠牲によってしか自分の存在価値を見いだせない。作品中、恩人である島本文彌の暗号電話を解説するか否かに悩まされる賢治は、「節操」(日本) と「忠誠心」(アメリカ) の二重の重みを背負っている。

このような薫陶くんとうを受けた恩人、島本文彌が、敗色濃いドイツから日本へ連絡する暗号電話を、いずれ誰かが解くとはいえ、自分がやってしまったのかと思うと、激しい自己嫌悪けんおと罪悪感さいなに苛こまれた。

キャンプ・サベージの日本語学校の教官になることを勧められた時は、日本語を通して日本と日本人を教えることが出来ればと自らの心を整理し、納

³⁷ 「黒人と言語」－『黒い皮膚、白い仮面』p. 43

³⁸ 「黒人と言語」－『黒い皮膚、白い仮面』p. 41

³⁹ <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/050228ty.html> 2013. 10. 13

得させたものが、正体を失うほど酔い痴^しれた中で、平衡を失ってしまった。

(「七章血の証し」—『二つの祖国』(二)、p.112、113)

「一体、自分の心の中に確然として存在するものは何だろうか」と自問した賢治は「言葉を選び、日本に致命的な表現は避けて訳すこと」に決める。すでに論じてきたように、自己同一性が混淆した状態の下で、言語は決定的な影響力がある。「アメリカ市民として、合衆国に忠誠を尽くす」賢治は、戦後東京裁判のモニターになり、「敗戦日本のために何かな」そうとして努める。その前後の行為に照らしてみると、言語の作用力は絶えず彼の自己存在の軌道を修正する。

しかしながら、同じ日系二世であっても、賢治の弟である忠と勇は、それぞれ異なる道を選ぶことに決める。日本においてもアメリカにおいても差別された忠は、日本人軍人として従軍することを決意する。一方、アメリカにいる勇は米陸軍に志願するが、ヨーロッパ戦線で戦死してしまう。勇が書いた家信には、母国の言葉への記憶が薄らいでいく日系二世の母語に関する言語運用の有様が描かれている。

父サン、母サン、ハルコ、ミナサンハオ元気デスカ。僕モタイヘン、オ元気デスカラ、安心シテ下サイ。

僕ハオ手柄ヲタテテ、勲章ヲイタダキマシタ。僕ノホカニモ、勇マシイ二世部隊ハ、タクサンノ勲章ヲイタダイテイマス。

僕タチハ今、二ツノ戦ヒヲシテイルノデス。一ツハ、ドイツ軍トノ戦ヒ、モウ一ツハ、アメリカ本土ノ収容所ニ入レラレテイル父サンヤ母サン、弟妹タチガ、一日モ早く収容所カラ出ラレルタメニ、血ヲ流シテ戦ッテイルノデス。(「七章血の証し」—『二つの祖国』(二)、p.137)

それは如何にも「敬語の間違いや、誤字の多い」エクリチュールであるが、「親たちを収容所から出すための戦い」という勇の気持ちを伝える一方、「アメリカに忠誠を尽くす」志を明示する両義性をもつ。アメリカに移住したとしても、植民地にいる如く日本人移住民は疎外されつつ、劣等感を蒙る。ファノンが示しているように、「言語を所有する人間は、当然の帰結として、この言語によ

って表現され、包含された世界を所有する」⁴⁰のであり、中途半端な日本語を所有する日系二世は中途半端な日本語世界を所有すると言ってもいい。戦時中強制キャンプに収容された日系米人は、人種差別を受けつつ、絶えず白人に近づく自己欺瞞の試練に耐える。結局のところ、劣等感と依存の間に引き裂かれた自己同一性は彼らを自己犠牲の道に導いていくことになる。父祖の国により一層近づくか、それとも遠ざかるかは、言語の働きにより決められてしまう。

戦時体制における多文化・多言語主義の存在が好むと好まざるとにかかわらず、すべて主体性を持つ他者に決められると言える。つまり、戦時体制の下で、言語使用の権利が制約され、更に政治力に翻弄されてしまい、多言語使用の可否はすべて有力の他者に制御される。スターリンの「言語が階級的な性格をもたない」という主張に反論する言語学者田中克彦は「言語規範は、特定の階層を言語的に有利し、他の階層を言語的に追撃する機会を常に保証する」⁴¹としている。ある言語の使用ということは、ある「文化の勢力圏に自分が所属している」ことを証明する一方、「他者を排除する障壁としての機能」⁴²をもつ二重性を有する。このような言語の特性は、移民者・被植民者に「国家」への向心力を求める政治力の一環として他者に操られる。日中戦争の最中に、全島遊説の弁論部員となったり、皇民化劇の役者の日本語先生となったりした天徳といい、アメリカの言語情報官となった賢治といい、こうした「言語の階級的な性格」に翻弄された証である。

五、むすびに

すでに論じてきたように、戦時態勢の下で、自己存在の価値は常に政治力をもつ他者に決められる。その自己と他者の間に軋轢が生じるとき、自己同一性の殺戮も展開してしまう。「密入国者の手記」と『二つの祖国』のテキストに織られるエクリチュールによれば、主体に近づけようと試みるどころか、却って自己の客体としてのシチュエーションが顕著となり、徐々に自己犠牲や自己欺瞞の道程を辿るようになる。結局、こうした自己は去勢された者であるし、永遠に主体の枠組みに疎外されてしまうよそ者である。その過程において、常

⁴⁰ 「黒人と言語」－『黒い皮膚、白い仮面』p. 40

⁴¹ 言語学者田中克彦はスターリンの「言語が階級的な性格をもたない」という主張に反論を出し、彼は「社会的観点」を用いてそれが「正しくない」と指摘している。田中克彦（2001）「V国家語イデオロギーと言語の規範」－『言語からみた民族と国家』岩波書店 p. 210

⁴² 田中克彦（2003）「Ⅲ章民族語の思想」－『言語の思想』岩波書店 p. 202

にツールとして用いられるのは「言語」であり、それはよく政治的戦略と結びつき、移民者や被植民者を翻弄する。一見多文化主義のイデオロギーが芽生えたかのようなのであるが、実際に政治力に操られる仮面的なものである。そのような二重か三重の言語世界に包含された知識、文化などのエレメントは、たえず引き裂かれたアイデンティティを再構築することを営むことが分かる。

参考書目

- 島村喬（1967），『二重国籍者』，東京：原書房
張文環（1975），『地に這うもの』，東京：現代文化社
E・H・エリクソン、岩瀬庸理訳（1994），『青年と危機 アイデンティティ』，
東京：金沢文庫
島村喬・加瀬英明等（1983），『実録 山河燃ゆ』，東京：ゆまにて
岡崎郁子（1996），『台湾文学—異端の系譜』，東京：田畑書店
黒川創編（1996），『南方・南洋／台湾』，東京：新宿書房
渋谷田鶴子（1999），「異文化交流とアイデンティティ」－『アイデンティティ』，東京：日本評論社
丸川哲史（2000），『台湾、ポストコロニアルの身体』，東京：青土社
松本幸四朗（2000），「天羽賢治を演じて」－『大東フォーラム』第13号，東京：大東文化大学
田中克彦（2001），『言語からみた民族と国家』，東京：岩波書店
鵜飼清（2002），『山崎豊子問題小説の研究—社会派「国民作家」の作られ方』，
東京：社会評論社
田中克彦（2003），『言語の思想』，東京：岩波書店
フレンツ・ファノン、海老坂武・加藤晴久訳（2005），『黒い皮膚、白い仮面』，
東京：みすず書房
J・P・サルトル、松浪信三郎訳（2005），『存在と無』（上）（下），
京都：人文書院
フレンツ・ファノン（2006），『地に呪われたる者』，東京：みすず書房
柏端達也（2007），『自己欺瞞と自己犠牲』，東京：勁草書房
ノーム・チョムスキー、加藤泰彦・加藤ナツ子訳（2008），『言語と認知』，
東京：秀英書房
山崎豊子（2009），山崎豊子自作を語る1『作家の使命 私の戦後』，
東京：新潮社
山崎豊子（2009），山崎豊子自作を語る3『小説ほど面白いものはない』，
東京：新潮社
ロラン・バルト、花輪光訳（2010），『物語の構造分析』，東京：みすず書房
王育徳（2011），『「昭和」を生きた台湾青年』，東京：草思社
山崎豊子（2011），『二つの祖国』（一）（二）（三）（四），東京：新潮社
ノーム・チョムスキー、町田健一訳（2011），『言語と精神』，
東京：河出書房新社
栗原裕一郎（2011），『＜盗作＞の文学史』，東京：新曜社
佐藤春夫他（2012），『コレクション戦争と文学18 帝国日本と台湾・南方』，
東京：集英社